

# 社会科学方法論としての弁証法の定式化

## 時間的運動形態と機能・制限

板 木 雅 彦

### 目 次

1. 時間的運動形態
2. 存在の必然性

#### 1. 時間的運動形態

わたしたちの認識のなかで、事物はここから、時間的な運動を開始する<sup>1)</sup>。事物の一般的存在形態と空間的な一般的運動形態は、すでに前提されている。つまり、空間的に全面展開した事物の全要素が、わたしたちの認識の中で、いよいよ時間的な連関を開始するわけである。では、事物の時間的な運動とは、いったいどのような運動であろうか。

要素の空間的な展開を前提として、時間の経過とともに全要素の連関性が質的に変化する

それは、まずこのように一般的にとらえることが可能である。しかし、議論の前提として、全要素の存在そのものは所与とされているのだから、その生成が問題なのではない。また、事物は、いよいよここから時間的な連関を開始するのだから、その死滅を取り扱うのはまだ早すぎる。そうすると、生成でも、死滅でもない事物の時間的運動とは、事物の**再生産運動**にほかならない。

事物の再生産運動とは、すでに完成された事物の存在を前提した上で、その内的なメカニズムによって自分自身を再生する運動である。事物の一般的存在形態が、総体として1回だけ再生産を行なう様子がここで観察される。1回の再生産運動を通じて、最初前提されていた全要素とその連関性がいったん死滅したうえで再生し、次の2回目の再生産運動が可能になる諸条件が明らかにされる。これはまた同時に、このような全要素の再生産運動を可能にする一般的要素の時間的な媒介機能を明らかにすることでもある。そしてまた、このことは、全要素の再生産運動をある一定の量的限界の

なかに押しとどめるための諸制限形態を明らかにすることでもある。  
以上から、時間的に展開する事物の純化された表象は、次のように定式化することができる。

時間的に展開する事物の表象

$$\begin{aligned} &= [ \text{連関性 ( 一般的要素の時間的媒介・制限性 )} \\ &\quad \text{時間的に展開する全要素} ] \\ &= [ \text{再生産運動を媒介・制限する一般的要素} \quad \text{再生産運動する全要素} ] \end{aligned}$$

さて、ここからわたしたちは、時間的に展開する事物の諸形態を一つ一つ明らかにしていくのだが、時間的運動における「個別的運動」、言い換えればその1単位とは、いったい何だろうか。ここでわたしたちが分析の対象としている事物の運動は、その再生産運動であるから、事物の1回の再生産が、時間的運動の1単位ということになる。しかしまた、この1回の再生産は、事物にとっての運動時間の1単位でもある。あらゆる事物は、再生産時間を単位として、自分自身の時刻を刻んでいると考えることができるからである。この時間的運動の1単位=再生産時間は、わたしたちの時計が刻む物理時間 1分とか、1秒とか、1日といった時間的単位 とは区別されたものである。

もっとも、このような物理時間もじつは、再生産=周期性と切り離せないものであって、今日ではセシウム133の原子からの放射周期の91億9263万1770倍を1秒と定めている。これももともとは、地球の公転周期を1年として、これに(365×24×60×60)分の1を掛けて割り出されたもので、米、麦等の重要穀物の年間再生産時間がその物的基礎となっている。つまり、あらゆる事物は、この物理時間を基礎としながらも、それぞれに固有の運動・再生産時間を生きているわけである。

「体の小さい人の動作はきびきびと機敏で、見ていて気持ちがいい。大きな人の動作は、ゆったりと悠揚迫らぬものがある。動物の動きにしてもそうで、ネズミはちょこまかしているし、ゾウはゆっくりと足を運んでいく。体のサイズと時間との間に、なにか関係があるのではないかと、古来、いろいろな人が調べてきた。たとえば、心臓がドキン、ドキンと打つ時間間隔を、ネズミで測り、ネコで測り、イヌで測り、ウマで測り、ゾウで測り、と計測して、おのおの動物の体重と時間との関係を求めてみたのである。・・・いろいろな哺乳類で体重と時間とを測ってみると、こんな関係が浮かび上がってきた。

$$\text{時間} \propto (\text{体重})^{\frac{1}{4}} \quad ( \propto \text{は比例するという記号} )$$

時間は体重の1/4乗に比例するのである。体重が増えると時間は長くなる。ただし

1/4乗というのは平方根の平方根だから、体重が16倍になると時間が2倍になるという計算で、体重が16倍なら時間も16倍という単純な比例とは違い、体重の増え方に比べれば時間の長くなり方はずっとゆるやかだ。ずっとゆるやかではあるが、体重とともに時間は長くなっていく。つまり大きな動物ほど、何をするにも時間がかかるということだ。・・・この1/4乗則は、時間がかかっているいろいろな現象に非常にひろくあてはまる。たとえば、動物の一生にかかわるものでは、寿命をはじめとして、おとなのサイズに成長するまでの時間、性的に成熟するのに要する時間、赤ん坊が母親の胎内にとどまっている時間など、すべてこの1/4乗則にしたがう。」（本川（1992）3 - 4ページ）

空間的運動形態のところでも明らかになったように、要素は、これまで大きく三つに区分されてきた。すなわち、普通要素、一般的要素、代理要素がそれである。しかし、ここでさらに、再生産時間の観点から要素に新たな区別が現れる。すなわち、**流動的要素**と**固定的要素**の区別がそれである。

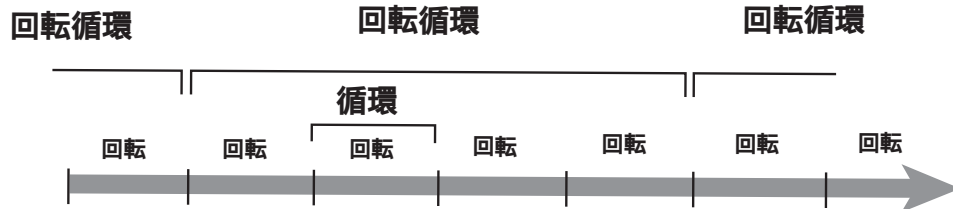
通常、普通要素が1回の再生産運動で完全に費消されてしまうのに対して、一般的要素や代理要素は、何回か複数回再生産が行なわれる期間を通して存在し、継続して媒介活動を行なうことが多い。たとえば、労働手段がそうである。労働力（一般的要素）と労働対象（普通要素）が生産期間ごとに更新されるのに対して、労働力の一般的代理要素である労働手段は、長期間存在して償却期間ののちにはじめて一括して更新される。また、国家がそうである。階級関係の一般的代理要素である国家は、支配階級（一般的要素）と被支配階級（普通要素）のいくつもの再生産期間を通じて長期的・安定的に存在し、機能する。そして、王位の継承や選挙によって更新される。これに対して、商品（普通要素）と貨幣（一般的要素）の関係で言えば、紙幣や鑄貨や商業信用貨幣が固定的性質をもつとともに、一般的要素である金貨幣そのものも耐久性をもっている。

もっとも、普通要素や一般的要素と同じように、代理要素がそのつど再生産される事物がけっして存在しないとは言えないが、機械や国家の例を考えてみてもわかるように、そのような耐久性を欠いた代理要素を用いた空間的媒介は、きわめて非効率である。したがって、そのような状況は、事物がまだ生成途上にあって未成熟な段階にある場合に限られると思われる。また本来、一般的要素は、ある特定の個別的要素が全個別的要素の中から抽出されて、全体の統括と媒介の機能に特化したものであるから、再生産期間の上で普通要素とのあいだに区別がないということもある。しかし、上の貨幣・金の例に典型的に現れているように、この統括・媒介機能をより有効に遂行するために、特別の自然的条件を備えた物質　硬度が高く、さまざまな化学物質に対して腐食せず、しかも融解が容易、等々　が一般的要素として抽出されて、長期に

わたり固定的に存在し機能することがある。

このように、再生産時間の観点から要素が二つに区分されるのに対応して、再生産運動そのものが三つの形態に区分される。すなわち、**循環運動**、**回転運動**、そして**回転循環運動**である。

流動的要素が行なう一回かぎりの再生産運動に注目して事物の時間的運動を観察したときに、わたしたちに認識されるものが、事物の循環運動である。これを事物の**個別的運動形態**と呼ぶことができる。事物にとってもっとも基本的な再生産活動が行なわれる形態がこれである。これに対して、一般的要素や代理要素などの固定的要素が行なう運動のように、再生産運動を一回かぎりのものとしてではなく何回も繰り返される連続したものとして観察したときに、わたしたちに認識されるものが、事物の**回転運動**である<sup>2)</sup>。各々の回転運動を通じて代理要素や一般的要素が徐々に消耗し、全回転期間を経過した後に、その更新、すなわち**固定的要素の再生産**が達成される。これをわたしたちは、**特殊的運動形態**と呼ぶことができる。最後に、いくつもの回転運動を含んだ、それ自体一つの循環運動をなしている運動が、事物の**回転循環運動**である。事物は、この**回転循環運動**を経ることによって、たんなる単純再生産ではない、**全要素の拡大再生産**を達成する。これをわたしたちは、事物の**一般的運動形態**と呼ぶことにする。



では、以上の予備的な考察をふまえて、さっそく時間的に展開する事物の個別的形態を定式化していくことにしよう。

個別的形態 = [ 個別的な再生産運動を行なう全要素 潜在的媒介・制限 ]  
= [ 循環運動する全要素 「貯蓄」機能 ]  
= [ 諸要素 一般的要素 / 個別的な暫定要素 ]

個別的形態は、わたしたちが個別的な再生産運動、すなわち循環運動を行なっている事物を観察する形態である。固定的要素を除く全要素が、1 循環期間中に完全に消耗されると同時に再生される。空間的展開の場合には、運動を媒介する一般的要素は最後に登場したが、時間的展開の場合には、これが最初から登場する。なぜなら、空間的展開のときと違って、全要素の運

動が最初から問題にされているからである。また、この一般的要素による媒介機能が「潜在的」と規定されているのは、個別的形態においては、事物総体の再生産がまだ達成されていないためである。

わたしたちは、事物の時間的運動を考察するにあたって、要素の全面的な空間的展開と統一性の確立を前提としているのだが、この前提は、わたしたちの認識上の前提であるということにくれぐれも留意しなければならない。というのは、現実の事物は、空間的全面展開を完了してはじめて時間的な再生産運動を開始するというわけにはいかないからである。両者は、現実には同時進行している。いやむしろ、現実の歴史過程では、再生産運動を通じて徐々に空間的な広がりを拡大していきいると考えるべきだろう。しかし、わたしたちは、空間的運動と時間的運動をいっぺんに理解することができないから、まず時間を止めて空間的運動を観察し、その後には今度は空間的变化を捨象して時間的な再生産運動を純粹に考察するわけである。したがって、論理的には、空間的運動の一般的形態ですでに、この事物が要素の量的発展の限界に達していると想定されている。だから、再生産運動は、**単純再生産運動**でなければならない。1回転循環の後には、全要素が同じ量的規模のもとに再生するわけである。そうでないと、事物が事物でなくなってしまう。

しかし同時に、再生産運動は、**拡大再生産運動**でなければならない。なぜなら、どのような特殊歴史的な装いを凝らそうとも、素材のもつ歴史普遍的な連結力、量的発展傾向は、いつの時代にも貫いていなければならないからである。したがって、要素の設定する歴史的限界は、事物の時間的展開を通じてつねに、歴史普遍的な素材による挑戦を受けている。ここに矛盾が発生する。そして、この矛盾は、この個別的形態のなかにもしっかりと植えつけられている。あるいは、その潜在的な契機が潜んでいるといった方が正確かもしれない。これを次に考察していこう。

一般的要素はまず、事物の単純再生産を媒介している。流動的要素が、1循環期間中に完全に消耗されると同時に再生されている。しかし他方で、一般的要素は、事物の拡大再生産をも潜在的に媒介している。この媒体が**個別的な暫定要素**である。

これは、事物の拡大再生産運動を媒介するために、一般的要素によって形成された特別な要素である。事物の拡大再生産とは、事物が1回転循環期間を終了する際に、最初に与えられた全要素が再生していると同時に、さらに新たな要素が付け加えられていることである。これが実際に可能になるためには、回転循環期間全体にわたってそのための準備が着々と進められていなければならない。これを循環運動において行なうことが、「個別的な暫定要素」の機能の内容である。すなわち、事物の循環運動の結果生み出された成果のなかから、一般的要素と諸要素の単純再生産に必要な部分を控除して、この個別的な暫定要素が蓄積されるわけである。

わたしたちは、このもっとも適切な例を、個別資本（個別経営体）が行なう貯蓄に見いだすことができる。将来行なわれる生産資本の量的拡大（＝投資）のために、生産の1循環期間中に行なわれる貨幣資本の新規蓄積が貯蓄である。可変資本も不変資本も、流動資本も固定資本も、すべてこの貯蓄をもとにして拡大再生産されていくことになる。定式において、個別的形態の媒介機能を「貯蓄」機能と言い換えたのは、このような個別資本からのアナロジー（類推）にもとづくものである。

しかし、貯蓄が貨幣資本の形態にとどまるかぎり、それは、まだ実現されていない、現実化されていない資本蓄積である。言い換えれば、生産資本の量的拡大（＝資本集積）を潜在的に媒介するものがこの貯蓄であるということができる。しかし、貯蓄にはつねに不確実性がつきまとっていることを忘れてはならない。将来必要とされる投資の量と質は、現時点ではまだ不確定である。しかし、その不確定な未来に向けて、一定の予測のもとにいま貯蓄が行なわれているわけである。

再生産運動における**不確実性**の問題は、貯蓄に限られるわけではない。将来のある時点で事物一般を拡大再生産しようとするかぎり、現時点における媒介は、つねに暫定的なものにとどまらざるを得ない。未来の事物がはたしてどのような量的・質的内容のもとに再生産されるかについて、外的環境の影響から、多かれ少なかれ不確実性が生じざるを得ないからである。事物の循環運動を媒介するために、一般的要素によって形成された特別な要素が、「個別的な暫定要素」と規定されるゆえんである。

ところで、「個別的な暫定要素」を媒体とする事物の拡大再生産運動は、一般的要素によって促進されているだけでなく、逆に制限されていることも忘れてはならない。事物が時間的に展開しようとするかぎり、一般的要素による媒介は不可欠だし、個別的暫定要素の形成も避けて通ることはできない。言い換えれば、そのこと自体は、歴史普遍的なことに属しているといつてよく、そこに歴史的な制限は発生しようがない。むしろ制限は、要素の量的発展を一定の限界内に抑え込むために、個別的暫定要素の形成を抑制することから発生する。このような阻害や抑制という作用は、事物と要素の歴史的的特殊性に由来するものである。これが、わたしたちのいう**個別的制限形態**の内容である。

わたしたちが個別的制限形態について一般的に言うことができるのは、ここまでである。そこで、この内容をより具体的に理解するために、再び、貯蓄の例を取り上げることしよう。資本主義における貯蓄は、剰余価値総額から資本家の消費を差し引いた残額である。賃金労働者の取得する賃金を生涯にわたって長期的に観察すると、最終的に次の世代に純貯蓄として残される部分は、ほとんどゼロとみなすことができる。壮年期に一時期貯蓄が膨らんでも、それは次の時期の住宅ローンと子供の教育費の負担によるマイナスの貯蓄によって相殺される。また最終的にわずかに貯蓄が残されたとしても、臨終医療と葬儀代で

ほとんど消し飛んでしまうのがつねである。したがって、労働者階級総体として観察すると、貯蓄をゼロと想定することはけっして極端な単純化ではない。そうすると、資本主義全体としての貯蓄のおもな出所は資本家の所得であり、したがってまたその総額は、資本家の消費分を剰余価値総額から差し引いた残額であるということになる。つまり、資本家の消費、言い換えれば資本家階級の存在そのものが、いわば死重となって社会の貯蓄総額にのしかかっているわけである。このように、資本の循環運動のなかにもすでに、生産力の発展を潜在的に阻害し、制限するメカニズムが植え込まれていると言うことができる<sup>3)</sup>。では次に、全要素の循環運動が連なって生まれる回転運動、すなわち事物の時間的運動の特殊の形態について考察していくことにしよう。

特殊の形態 = [ 顕在化する特殊の媒介・制限 再生産運動を展開する全要素 ]  
= [ 「減価償却」機能 回転運動する全要素 ]  
= [ 「減価償却」機能 単純再生産運動する全要素 ]  
= [ 一般的要素 / 特殊な暫定要素 諸要素 ]

特殊の形態は、事物の全要素が回転運動を展開することによって、事物の再生産運動と、その機能的な媒介運動がともに顕在化していく形態である。

循環運動でまず最初に観察されたものは、流動的要素の再生産であった。これに対して、この回転運動で観察されるのは、固定的要素の漸次的な消耗過程とその更新過程である。空間的媒介を行なう一般的要素や代理諸要素が、各々の回転期間中に徐々に消耗していき、全回転期間を経過することによって完全消耗されると同時に、更新される。こうして事物は、流動的要素に加えて固定的要素の再生産を達成することによって、その単純再生産を実現する。

ところで、固定的要素の消耗と更新を全回転期間にわたって着々と準備するものが、**特殊の暫定要素**である。個別的暫定要素が全要素の拡大再生産を媒介するものであったのに対して、この特殊の媒介要素は、固定的要素の更新を暫定的に媒介する点に特徴がある。

この特殊の暫定要素のもっとも適切な例は、固定資本の減価償却資金である。固定資本（機械等）を更新するために毎期積み立てられていく減価償却資金は、潜在的な固定資本であるということができる。生産資本として機械等の固定資本が徐々に消耗していくにしたがって、それと同額の貨幣資本が積み上げられていく。定式の中で、「顕在化する特殊の媒介・制限」を「減価償却」機能と置き換えたのは、このような固定資本の減価償却からのアナロジー（類推）にもとづくものである。

しかし、各回転期間ごとに、資本を取り巻く内外の状況は刻一刻と変化している。た

例えば、最初に購入した機械の価格の10分の1ずつをこの資本家は毎年積み立てて  
いっているかもしれない。しかし、10年後にはたして同じ機械が同じ価格で購入でき  
るだろうか。激しい競争の結果、もっと高性能で高価な機械でないと古い機械を代替  
する意味がないといった状況は生じていないだろうか。ここに、さまざまな不確実性  
が発生する。

これは何も固定資本の減価償却だけに限った話ではない。あらゆる事物にとって、回転期  
間を通じて内外の状況は刻一刻と変化していると考えなければならない。来期には何が起  
こるかわからない。しかし、一般的要素と暫定要素は、今期の状況を前提として来期に向  
けて諸要素の運動を媒介していかざるを得ない。ここに不可避免的に未来に関する不確実性  
が生ずる。したがって、回転運動の媒体は、どうしても暫定的な性格を免れないわけであ  
る。

ところで、この特殊の形態においてもまた、一般的要素と暫定要素による事物の運動の媒介は  
二重の意味をもっている。すなわち、事物の運動を機能的に促進する側面と、それを制限する  
側面である。

特殊の形態は、かつての個別的制限性の突破を可能にする形態である。個別的制限性とは、  
ある特殊歴史的な一般的要素という死重の重みによって、要素の拡大再生産が阻害される  
現象であった。具体的には、循環運動の成果が一般的要素のもつ特殊歴史的な性格の再生産  
のために一部消費されてしまい、個別的暫定要素の形成が量的に制限されてしまうわけであ  
る。特殊の形態は、このような1回の循環運動における量的制約性を、事物の何回もの  
回転運動によって克服する形態である。たとえ1回の循環運動によって形成される個別的  
暫定要素は少量であっても、これを何回も何回も繰り返すことによって、その制限を克服  
することができるからである。

しかし、ここに新たな特殊の制限が現れる。すなわち、暫定要素の歴史的死重としての  
重みである。全回転期間を通じて、個別のおよび特殊の暫定要素が徐々に積み立てられて  
いかなければならない。このこと自体は歴史普遍的な事態であるが、それがあつた特殊歴史的  
な形態をまとつたために必要な追加的な積み立てを含んでいるということが、この制限の  
内容である。

わたしたちは、この例を再び、資本家による貯蓄と減価償却積立金に求めることができ  
る。たしかに、剰余生産物の一部を未来の生産拡大のために貯蓄として蓄え、年々  
の機械や設備の消耗分を減価償却積立金として積み立てていくこと自体は、人類のい  
かなる歴史時代、社会においても共通して必要とされる活動である。しかし、それが  
貨幣資本の積み立てという歴史的形態をとり、それを取り扱うために特別の貨幣取引  
資本を生み出す。そして、そこには当然、貨幣取引資本家の一群が生み出されて徒



食を食むことになることは商品生産社会に特有な歴史現象である。また、これが社会の全体を覆い尽くしていくのは、爛熟した資本主義社会に特有な現象である。こうして年々歳々積み立てられる膨大な貨幣資本、それを扱うための貨幣取引資本をまかなうための費用は、歴史的に避けることのできない空費として、資本主義社会に重くのしかかってくる。

では最後に、全回転運動が再び1循環運動として総括され、文字通りあらゆる要素の拡大再生産が達成される一般の形態の考察に進むことにしよう。

$$\begin{aligned} \text{一般の形態} &= [\{ \text{顕在化した一般的媒介・制限} \quad \text{個別的な再生産運動を行なった全要素} \} \\ &\quad \{ \text{再生産運動を展開した全要素} \quad \text{潜在的媒介・制限} \}] \\ &= [\{ \text{「投資」機能} \quad \text{回転循環運動した一般的暫定要素} \} \\ &\quad \{ \text{回転運動した全要素} \quad \text{実現された拡大再生産} \}] \\ &= [ \text{一般的要素} / \text{一般的暫定要素} \quad \text{諸要素} ] \end{aligned}$$

定式の中で「実現された拡大再生産」と表現されているように、わたしたちが個別的物の全体的な拡大再生産を観察することのできる形態が、この最後の一般の形態である。

まず個別的形態において拡大再生産の萌芽が育まれていく様子が観察され、特殊の形態においてその萌芽が繰り返し再生産されていく様子が観察された。この一般の形態においてはじめて、それまでたんなる可能性にとどまっていた全要素の拡大再生産が、現実性に転化する。なぜなら、いままで「貯蓄」として蓄えられてきた個別的暫定要素が、ここで追加的な一般的要素、普通要素、代理諸要素に転化するからである。このような拡大再生産の実現を媒介するものが、**一般的暫定要素**である。一般的暫定要素は、いくつもの回転運動ののちにはじめて登場する。そして、この全回転運動が一つの運動単位となってこれから何回も繰り返されていくという意味で、一般的暫定要素は、回転循環運動を行なっている。この一般的暫定要素は、個別的暫定要素と特殊の暫定要素の統一物であると考えることができる。なぜなら、前者の拡大性と、後者の再生産性を統一したものである。

わたしたちは、この一般的暫定要素のもっとも適切な例を、投資（新規投資）に求めることができる。資本は、必要最低資本量まで貯蓄を行なった時点で、景気動向を見計らいつつ、投資を敢行する。つまり、投資を画期として新たな資本蓄積の回転循環運動が再開されるわけである。定式において「顕在化した一般的媒介・制限」を「投資」機能と置き換えているのは、このような資本蓄積からのアナロジー（類推）にもとづくものである。

しかし言うまでもなく、資本主義において投資は、一種のギャンブルのようなも

のである。なぜなら、今期投資された固定資本、流動資本によって、これから先、何年にもわたって剰余価値生産の内容が、質・量ともに条件づけられてしまうからである。資本主義を特徴づける生産の無政府性のゆえに、長い産業循環のあいだにはいったい何が起こるかかわからない。このような深刻な不確実性にもかかわらず、未来に対する予測と期待のもとに、今期の投資が敢行される。

このことは、たんに資本主義的蓄積にのみ妥当する事態ではない。あらゆる事物にとって、いくつもの回転期間を含んだ長期的な回転循環期間の最後には、この事物自身と、それを取り巻く外的環境がいったいどのようなものに変化しているのか、現時点ではまったく予想することもできない。しかし、それにもかかわらず、一般的暫定要素を用いた媒介活動は、今期の最初に与えられた諸条件を前提として開始されなければならない。未来に関するきわめて大きな**不確実性**にもかかわらず、あたかも諸条件が変化せず、確実に長期的な媒介が可能であるかのように想定することによってはじめて媒介活動が開始される。ここに不可避免的に媒介機能の暫定性、その機能的要素の暫定性が生じることになる。

さて、一般的形態は、拡大再生産の完成、あるいはその機能性の完成であると同時に、事物の歴史的限界が明解に自己を主張する形態でもある。この形態においてはじめて、事物を構成する全要素が単純再生産されるだけでなく、それが拡大再生産される。全要素の量的発展をある歴史的限界内にとどめなければならないにもかかわらず、それを乗り越える萌芽を生み出し、育み、そしてついにはそれを現実化させてしまうのがこの形態の宿命である。ここに、事物が不可避免的にはらむ矛盾が、いずれ爆発せざるをえない可能性として事物内部に組み込まれることになる。

事物を事物として維持するために、歴史的限界が、けっして乗り越えられてはならないものとして自己を主張する では、事物は、それをどのようにして行なうのだろうか。事物は、自己を保全するために、その存在そのものを賭けて歴史的限界を越えていこうとする要素の発展を阻止する。すなわち、その全運動、全媒介機能を一旦停止させることによって、それ以上の要素の発展を阻止し、さらには限界を超えて過剰に発展した要素を破壊しさえする。言うまでもなく、これは、危険極まりない戦略である。歴史的な存在である事物が、どんなことをしてでも自己の歴史性を維持するために、要素を破壊し機能を一旦停止し、歴史貫通的な存在そのものさえ犠牲に供しかねない自己保存作用を発揮する。これまで素材と要素の発展を促してきた事物が、ここに歴史的な反動に転化する。わたしたちは、このことのもっとも適切な例を、資本主義経済恐慌に見出すことができるように思う。

資本主義の過剰生産恐慌は、個別資本（資本主義的個別経営体）に包摂された生産力が、資本賃労働関係という資本主義的生産関係の外皮 すなわち、その歴史的限界

を突き破り、なおも発展を遂げようとするところに発生する。生産力がよりいっそう発展すればするほど、より緊密に社会化されなくてはならない生産諸組織が、資本主義においては無政府性と利潤動機のもとに置かれている。このことの限界が、生産の加熱局面（いわゆるブーム）において、産業予備軍 すなわち、大量の失業者の群れ が次第に枯渇し、賃金率の上昇による利潤率の圧迫がもはや資本家階級にとって耐えられなくなる限界点で一気に爆発する。これが過剰生産恐慌である。多くの個別経営体の破壊と失業者の膨張によって、単純再生産はおろか縮小再生産（いわゆるマイナス成長）が広がっていく。

ただし、このような事物の歴史的限界の爆発が、この一般的形態において全面的に観察されるわけではない。この一般的形態において観察されるのは、やはりあくまで限界の爆発的自己主張の可能性にとどまっている。ただそのことが、とくに個別的形態において観察されたようなたんなる抽象的可能性ではなく、具体的可能性にまで高められているのではあるが。この具体的可能性の現実性への転化の連続したプロセスとその帰結は、事物の発生過程の分析を踏まえた事物の転化過程の研究において明らかにされることになる。

以上、事物の時間的展開は、次のことに帰着する。事物は、必然性をもって存在しているということ、そして、自らに内在的な歴史性をもって存在しているということである。

事物は、循環運動、回転運動、回転循環運動によってはじめて、その時間的展開に質的な時期区分が与えられる。もし事物が、このような三つの運動形態によって与えられる時間的な断絶なしに、質的に一定のままたんに量的に変化していたとしたら、その存在に歴史性は存在しない。ただ、のっぺりとした事実の流れがあるばかりである。事物の時間的な質的变化、それが存在の歴史である。

この歴史はまた、客観的な歴史である。これは、事物に内在的な歴史であって、歴史家の解釈から独立した客観的な歴史である。そしてまた、これが事物固有の必然性の歴史であるということにも留意しよう。事物は、外的環境との相互作用の結果生まれる偶然性の衣をまといながら、自らを繰り返し繰り返し再生産することで、その存在の必然性を歴史の上に立証する。事物の必然性と偶然性 すなわち歴史性（歴史的存在性）の根拠を与えるものが、この三つの運動形態である。そして、この存在の必然性を出発点として、事物の生成の歴史、転換の歴史、発展の歴史がこれからの諸節で展開されていく。

さて、事物の時間的展開をめぐる以上の議論もまた、要素のもつ一様性、多様性、統一性を一まとめにした議論であった。実際にわたしたちが研究対象とする事物の時間的展開を分析する際には、この三つが厳密に区別されなければならないと同時に、正確に統一されていなければならない。本節の最後に、この三つの定式をまとめて掲げておくことにしよう。

時間的に展開する個別的物事の表象（一様性）

= [ 内的連関性（一般的要素の時間的一様性の媒介・制限性）  
時間的に展開する多様な全要素 ]

= [ 一様性の再生産運動を媒介・制限する一般的要素  
再生産運動する多様な全要素 ]

個別的形態 = [ 個別的な再生産運動を行なう全要素 潜在的媒介・制限 ]

= [ 循環運動する全要素 「貯蓄」機能 ]

= [ 多様な諸要素 一様性を体現した一般的要素 / 個別的な暫定要素 ]

特殊的形態 = [ 顕在化する特殊的媒介・制限 再生産運動を展開する全要素 ]

= [ 「減価償却」機能 回転運動する全要素 ]

= [ 「減価償却」機能 単純再生産運動する全要素 ]

= [ 一様性を体現した一般的要素 / 特殊的な暫定要素 多様な諸要素 ]

一般的形態 = [ { 顕在化した一般的媒介・制限 個別的な再生産運動を行なった全要素 }  
{ 再生産運動を展開した全要素 潜在的媒介・制限 } ]

= [ { 「投資」機能 回転循環運動した一般的暫定要素 }  
{ 回転運動した全要素 実現された一様性の拡大再生産 } ]

= [ 一様性を体現した一般的要素 / 一般的な暫定要素 多様な諸要素 ]

時間的に展開する個別的物事の表象（多様性）

= [ 外的連関性（一般的要素による時間的多様性の媒介・制限）  
時間的に展開する一様な全要素 ]

= [ 多様性の再生産運動を媒介・制限する一般的要素  
再生産運動する一様な全要素 ]

個別的形態 = [ 個別的な再生産運動を行なう全要素 潜在的媒介・制限 ]

= [ 循環運動する全要素 架空「貯蓄」機能 ]

= [ 一様な諸要素 多様性を体現した一般的要素 / 個別的な暫定要素 ]

特殊的形態 = [ 顕在化する特殊的媒介・制限 再生産運動を展開する全要素 ]

= [ 架空「減価償却」機能 回転運動する全要素 ]

= [ 架空「減価償却」機能 単純再生産運動する全要素 ]

= [ 多様性を体現した一般的要素 / 特殊的な暫定要素 一様な諸要素 ]

一般的形態 = [ { 顕在化した一般的媒介・制限 個別的な再生産運動を行なった全要素 }  
{ 再生産運動を展開した全要素 潜在的媒介・制限 } ]

= [ { 架空「投資」機能 回転循環運動した一般的暫定要素 }  
{ 回転運動した全要素 実現された多様性の拡大再生産 } ]

{ 回転運動した全要素 実現された多様性の拡大再生産 }]  
= [ 多様性を体現した一般的要素 / 一般的暫定要素 一様な諸要素 ]

時間的に展開する個別的事象の表象（一様性かつ多様性）

= [ 内的かつ外的連関性（一般的要素による時間的統一化の媒介・制限）

時間的に展開する一様かつ多様な全要素 ]

= [ 統一性の再生産運動を媒介・制限する一般的要素

再生産運動する一様かつ多様な全要素 ]

個別的形態 = [ 個別的な再生産運動を行なう全要素 潜在的媒介・制限 ]

= [ 個別的再生産運動を行なう全要素 「貯蓄」統一化機能 ]

= [ 循環運動する一様かつ多様な諸要素

統一性を体現した一般的要素 / 個別的暫定要素 ]

特殊の形態 = [ 顕在化する特殊の媒介・制限 再生産運動を展開する全要素 ]

= [ 「減価償却」統一化機能 回転運動する全要素 ]

= [ 「減価償却」統一化機能 単純再生産運動する全要素 ]

= [ 統一性を体現した一般的要素 / 特殊の暫定要素

一様かつ多様な諸要素 ]

一般的形態 = [ { 顕在化した一般的媒介・制限 個別的再生産運動を行なった全要素 }

{ 再生産運動を展開した全要素 潜在的媒介・制限 } ]

= [ { 「投資」統一化機能 回転循環運動した一般的暫定要素 }

{ 回転運動した全要素 実現された統一性の拡大再生産 } ]

= [ 統一性を体現した一般的要素 / 一般的暫定要素

一様かつ多様な諸要素 ]

なお、時間的に展開する個別的事象の表象（多様性）の定式に登場する架空の「貯蓄」「減価償却」「投資」機能、また、時間的に展開する個別的事象の表象（一様性かつ多様性）の定式に登場する「貯蓄」「減価償却」「投資」の統一化機能の詳細については、改めて具体的な例証を用いて論ずることとしたい。

## 2. 存在の必然性

事象の時間的運動形態の解明は、事象に関するわたしたちの認識において、ある意味で決定的な跳躍点となるものである。

わたしたちはいままで、事象の存在形態、空間的運動形態を検討するにあたって、事象そ

のものの存在を前提してきた。わたしたちの研究対象としてすでにそこに与えられた事物を、顕微鏡を使い、虫眼鏡を使い、肉眼を使って三重の観点から観察し、存在と機能の個別的・特殊的・一般的形態を明らかにしてきたわけである。事物そのものは、すでにそこに存在しているのであって、なぜそこに存在するのか、どのようにしてそこに存在するようになったのか、といった問いかけをいっさい行なってこなかった。だから、たとえどれだけ精緻に存在と空間的機能の諸形態を分析したとしても、そのことは、いっこうに事物の存在の必然性を明らかにしたことはならなかったのである。

しかし、事物の時間的運動形態の解明によって、わたしたちの認識は俄然違ったものになる。事物の全要素と連関性が再生産運動する諸条件が解明されるわけだから、その事物が「どのようにしてそこに存在しているのか」が明確になる。あるいは、事物の存在を繰り返し維持していくための実践的な処方箋が示される。言い換えれば、事物がそこに存在していることの**必然性**が明らかにされる。もはや、事物は、分析の前提としてたんに与えられたものではなくなる。

もちろん、わたしたちが分析の対象としている事物のすべてが、再生産の諸条件を備えているわけではけっしてない。ある事物は、自分の内部にその諸条件を生み出すメカニズムを備えているが、別の事物は、外部の他の事物にその諸条件を依存している。つまり、前者は自らの存在の必然性をその内部に備えているが、後者は備えていない。言い換えれば、後者がはたしてほんとうに存在するかどうかは外部の別の事物次第という意味において、その存在は偶然的なのである。たとえば、機械がその例である。機械は、存在形態と空間的運動形態をもっているが、時間的運動形態はもっていない。機械は、自分自身を再生産することができないからである。したがって、歴史的にはともかく 工学的には、機械の存在は偶然的である。

しかし、この存在の必然性、偶然性という認識上の区別もまた、相対的なものであることに注意しなければならない。

たとえば、個別資本（資本主義的個別経営体）は、自ら再生産するメカニズムを備えているとすることができる。しかし、この個別資本を取り巻く外的環境（たとえば、労働力や生産手段の購入価格、生産物の販売価格などの市場環境）が、ある一定の諸条件に収まっていることを前提したうえで始めてそういえるのであって、たとえば、石油価格が急騰して倒産に至るといったことは当然ありうる。つまり、総資本の観点からいえば、一つ一つの個別資本の存在は、偶然的である。しかし、この総資本についても同様のことが言える。各国資本主義は、それぞれ再生産メカニズムを備え、その意味で存在の必然性をもっていると言うことができる。もちろん、そのメカニズムの強度、独立性は各国資本主義ごとにさまざまであるとはいっても、個別資本のそれに比べて格段に強力な再生産メカ

ニズムを備えている。しかし、そのような各国資本主義にしても、世界経済総体の観点からいえば、その存在は偶然的である。さらに、この資本主義的世界経済にしても、自らが再生産することのできない自然環境の諸条件にその存在を委ねているという事実は否定できないのであって、地球的な自然的物質代謝の観点から見れば、資本主義的世界経済でさえ、その存在は偶然的なものに過ぎない。

科学の任務は、事物の必然性を解明することにあるが、それはけっして偶然性を否定するものではないし、また偶然性を否定するところに、科学は成立することができない。一定の分析対象・範囲、そして分析レベルを限定し、それ以外の外的諸条件を所与と想定した上における必然性の解明が、科学本来の使命である。

ところで、時間的運動形態で明らかにされるのは、事物の存在の必然性である。しかし、事物の必然性には、これ以外にも、事物が生成する必然性、事物が新しい段階に転換する必然性、事物そのものが死滅し、新しい事物が生成する必然性がある。これらはすべて、存在の必然性の解明ののちに、これを基礎として、生成過程論、転換過程論、発展過程論の諸節で取り扱われることになる。

## 注

- 1) 本稿は、すでに発表した板木(2002)(2003)の続編をなすものである。つまり、「社会科学方法論としての弁証法の定式化」の第4節の後半部分に相当する。
- 2) マルクスは、資本の循環と回転にかかわって、次のように述べている。  
「資本の循環が個々別々な過程としてではなく周期的な過程として規定されるとき、それは資本の回転と呼ばれる。この回転の期間は、資本の生産期間と流通期間との合計によって与えられている。この総期間は資本の回転期間をなしている。」(マルクス[1885]s. 157, 190ページ)
- 3) しかしながら、現実にはさらに複雑である。一方では、カードローンなどの手法で労働者家族の消費を煽り、貯蓄を減少させるメカニズムが資本主義商品経済には組み込まれている。しかし他方で、個々の労働者家族では十分に活用できない小額貯蓄でも、これを社会的に集中して資本家の投資要求に供することによって、資本家貯蓄を補完するメカニズムもまた同時に用意されている。これらの諸要因が、本文で述べた資本家階級の消費という根源的な社会的・歴史的死重とからみあいながら、個別的制限形態が展開されていく。

## 参考文献

- 板木雅彦 (2002) 「社会科学方法論としての弁証法の定式化 表象および存在形態と本質(上)(中)(下)」『立命館国際研究』第14巻4号, 2002年3月, 1 - 25ページ, 第15巻1号, 2002年6月, 53 - 72ページ, 第15巻2号, 2002年10月, 1 - 17ページ
- 板木雅彦 (2003) 「社会科学方法論としての弁証法の定式化 空間的運動形態と機能・制限」『立命館国際研究』第15巻3号, 2003年3月, 249 -

ウィーナー, ノーバート

[ 1961 ] ( 1962 ) 『サイバネティックス 動物と機械における制御と通信』第2版, 池原止戈夫他訳, 岩波書店

子安増生 ( 2000 ) 『心の理論 心を読む心の科学』岩波書店

ヘーゲル, G.W.F.

[ 1817 ] ( 1978 ) 『小論理学(上)(下)』(松村一人訳) 岩波書店(岩波文庫)

マルクス, K. ( 1968 ) [ 第1巻1867, 第2巻1885, 第3巻1894 ]  
『資本論』全5冊(マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳) 大月書店

本川達雄 ( 1992 ) 『ゾウの時間ネズミの時間 サイズの生物学』中公新書

森宏一編 ( 1985 ) 『哲学辞典』第4版, 青木書店



## Formulation of Dialectics as Social Science Methodology: Forms of Motion in Time and their Functions and Barriers

The first section examines 'Forms of motion in time': Motion in time is motion for an individual object to achieve its reproduction over time, in which elements are classified into liquid and fixed elements. Liquid elements are regenerated in one circuit of reproduction and, by contrast, fixed elements over several circuits of reproduction. And thus, motion of reproduction is distinguished into a circuit, a turnover and a turnover cycle.

The individual form of motion in time deals with a circuit of an object, at the end of which all the liquid elements are reproduced with the help of the individual interim element that fulfills the function of 'saving' for reproduction on an expanded scale in the future. The particular form of motion in time deals with a turnover of the object, consisting of a set of circuits, in which all the fixed elements are depreciated and regenerated on the same scale and in the same quality. The particular interim element intermediates the process with its 'depreciation' function and enables the simple reproduction of the object. The general form of motion in time deals with a turnover cycle of the object, which completes its reproduction on an expanded scale with the help of the general interim element fulfilling the function of 'investment'. However, the historical limit inherent in the object finally manifests itself in that the object stops at the end of a turnover cycle all its motions and functions in an attempt to bar the quantitative development of its elements beyond a historically imposed upper threshold.

The second section examines the 'Necessity of existence': Once we understand forms of motion in time and how an object reproduces itself over time, the object does not exist as a mere precondition of our research, but as a necessity, which contains its own indigenous conditions and mechanisms of reproducing itself.

(ITAKI, Masahiko 本学部教授)